

はじめに——なぜみんなの政治学なのか

世の中をつくりあげている要素をおおざっぱに「政治」「社会」「経済」「文化」に分類してみると、「政治」は極端に縁遠く感じないでしょうか。「社会」は私たちの日常の交流から、「経済」は私たちの日常の生活から、「文化」は私たちが日常に抱く興味から、それなりに説明することができます。でも「政治」は、私たちの日常からははるか遠く雲の上にあるもの、したがって私たちの交流や生活、興味から閉ざされた世界というイメージがあるのではないのでしょうか。だから僕のように政治を専攻し、学生のみなさんに政治学を講義しなければならない立場からすると、社会学や文化研究の先生方は羨ましいと思ったりもします。社会学や文化研究の優れた先生方は、みなさんの興味関心に触れる具体的な事例から出発して、世の中を語ることができるからです。高円寺の音楽業界の分布図や、都内の沿線文化の違い、映画における外国人の表象の変遷から社会や文化を論じる講義など、僕も授業をうけたいくらいです。

「国会」「選挙」「政党」「内閣」——これらは政治制度の基礎的な用語です。「民主主義」「権力」「保守」「リベラル」——これらは政治思想の基礎的な用語です。こうした用語は、みなさんも高校の公民の教科書で目にしたと思います。実際、受験勉強でも暗記したでしょうから、知識としてはあると思います。しかしこれらの用語には、みなさんが日常の文化を語るときのような生き生きとした魂はこもっているでしょうか。

ではどのようにして、「政治」は生き生きとしたものとして語れるか。そのヒントは、今は亡き偉大な政治学者丸山眞男が与えてくれました。彼はこういいます。「政治とは、社会、経済、文化の「余り」のようなもの」だと。

つまり私たちの日常の世界をかたちづくる社会、経済、文化のうちではどうしても収まりきらないモノが「政治」だと、丸山眞男はいいたいのでしょうか。日常世界では解決できない事を解決するためにたどり着くのが「政治」だともいえます。丸山眞男のいうとおりなら、こう聞き直ることもできます。「政治に関心がないのがあたりまえ。わたしが必要だと思った時に、政治の扉は開かれる」と。

みなさんのような若い世代の政治への接点、関心の持ち方は実に多種多様です。Twitterの世界だけでも、その多様さを垣間見ることはできます。たとえばきんきん@Kyonkyon_senkyoという大学生のアカウントは、選挙測や政治分析をもつばらやっていますが、専門家であるはずの僕も驚くほど博識で、政治文書の読み方なども舌を巻くレベルです。いったいどうやってこの知識や経験を身につけたのかがわからなかったたので、質問してみるとどうも政治学の本や論文からというよりもネット空間をフローする情報を読み解きながら自分なりの判断力を鍛えたようです。彼は感情的になりがちなTwitter世界の中で冷静沈着に「わかってない若者に教えてやる」系のオッサンアカウントにからまれても平然としています。FREE高等教育無償化プロジェクト@FREE20180913というアカウントは、高等教育の無償化を求める大学生たちのグループのアカウントです。コロナ下で困窮した大学生たちの要求を実現するため、学費の減免や無償化を求めて署名を集めたり、政党や政府と交渉を行っています。仁藤夢乃さん@colabo_yumenoは大学時代からボランティア活動に従事し、女子高生サポートセンターColaboという、夜の街を徘徊する少女に声をかけ、食事を提供し、福祉支援につなぐ団体を主催しています。彼女は性暴力や性搾取の問題を解決するために、政府や政治家へのロビー活動に一貫して取り組んでいます。彼女は性暴力や

2つ3つのケースをあげてみても、若者の政治への関心のもち方、かわり方は多種多様でバラバラなことがあります。政治はあくまで社会的、文化的にかたちづくられるそれぞれの経験の「余り」であり、そこにたどり着く機会はさまざまです。したがって「これが政治だ」という答えをいつてしまいがちな僕のような政治学者は反省

しなければならぬことになります。ですから本書では、あなたが政治をどう発見するかはあなたに委ねて、みんなの政治学を論じたいと思います。なぜ、みんななのか。

みなさんの中には「自分はけっこう政治に関心と知識を持っている」という自負がある方もいると思います。でも、政治について友達と議論するとなるとかなりハードルが高いのではないのでしょうか。NHK総合日曜深夜のアニメ枠で放映されている『キングダム』『進撃の巨人』『映像研には手を出すな』のうち、どれが好きかを議論するのと、「自民党、立憲民主党、共産党のうちどれを支持するか」を議論するのでは、ハードルの高さが違います。政治的なものごとを議論するハードルの高さは、実は若者だけではなく、あらゆる世代でも共通しています。したがって同じような意見をもった人間同士だけで政治的な話がなされがちになり、みんながみえなくなる。後に論じますが、SNSにおける「エコーチェンバー現象」（閉鎖空間におけるコミュニケーションが引き起こす、同調圧力の増幅現象）というのはこうした傾向から生じます。どのアニメが好きかは「違い」であり、どの政党を支持するかは「対立」になる。対立を回避するがゆえに、みんながどう考えているのかがみえなくなります。

ここでいうみんなとは、みなさんの世代のことです。10代後半から20代の後半あたりまでの世代が、他の世代と比べてどんな価値観をもっているのか。それをさまざまな世論調査や社会調査から明らかにしながら、みなさんの世代の政治意識を明らかにしていきます。私たちは普段は、自分の考えや価値観は自分オリジナルなものだと思いがちですが、実際は特定の社会的条件によりフレームが課されています。カール・マンハイムというドイツの知識社会学者はそれを「存在被拘束性」と名付けました。特定の世代には、その世代が成長してきた社会のあり方に根差す独特の世界観があり、その世界観の土台の上にそれぞれの個性があるということです。ですから、みなさんが日常生活でごくあたりまえと思っていることは、実はおじいさんやおばあさんにとっては異世界ということよくあります。たとえば現在も放映されている『サザエさん』というアニメに登場する三世同居家族は、おじいさん

おばあさんの世代にはごくあたりまえでした。しかしいまのみなさんの世代ではまれであり、したがって『サザエさん』は昔話としてみられていることでしょう。むしろみなさんの世代ならば『鬼滅の刃』で描かれたような家族像の方がリアリティがあるのではないのでしょうか。この本の第一の課題は、みなさんの世代の価値観や感覚、そしてみなさんを取りまく社会、経済、文化の仕組みを僕なりに明らかにしながら、「政治」にかかわる手がかりを考えていくことにあります。

もうひとつの課題は「政治を変えること」の必要性について論じていくことです。みなさんが政治を縁遠く感じるもうひとつの理由は、実際に政治がみなさんから遠いところで行われていることにあります。日本の人口構成は、「団塊の世代」といわれる70代以上の人口が最も多く、次にみなさんの親の世代にあたる「団塊ジュニア世代」が多くなります。人口が多ければ当然マーケットも大きいわけですから、マスメディアを中心に支配的な価値観は上の世代向けにできあがっています。そして政治においても投票率は上の世代になればなるほど高いですから、おのずと政治への影響は上の世代になるほど強くなっています。つまりこの国の価値観や仕組みは、かなり上の世代に支配されているのです。でも、時間が経てば、この上の世代は「退場」していきます。「退場」したらマーケットのあり方は劇的に変化し、この国のかたちはいやおうなく変わらざるをえなくなります。これは「2025年問題」といわれはじめています。2025年には人口規模が最も大きい「団塊の世代」が75歳以上の後期高齢者になり、世論やマーケットの中心がより下の世代にシフトするからです。この人口変動による大規模な変化が、どのようなものになるかは、まだ不確定です。ただ確実なのは、これから時を経るごとにみなさんが世論の中心になっていくこと。そして身の丈にあわない政治のあり方を変えていかないとみなさんが生きやすい世界は守れないということです。「社会」「経済」「文化」の大規模な変化が確実に到来するもとので、それをみなさんにとって生きやすい世界にしておくためにも、政治を変える必要性があるのです。「変わらないためには、変わらなければならない」。こうした角度

から、政治を変えることの必要性を論じていきたいと思います。

また本書では、政治を論じるにあたって、僕が観てきた、あるいはみなさんが観たことがある漫画、アニメ、映画を題材として取り上げていきます。政治学 (Politics) とは公的空間における権力関係を扱う学問ですから、当然古今東西にある闘争の物語の中にその要素は詰め込まれているからです。私たちが魅了される物語から「政治」を論じてみる。これも本書のテーマのひとつです。

*** 注記およびQRコードにかんして**

本文中には適宜注記を付していますが、注記は巻末に、章順にまとめ掲載しています。また、注記に付随するネット上の典拠となるサイトに、QRコードより直接アクセスできるようにするため、注記の該当箇所の下段にQRコードを付しました。ご利用下さい（2022年2月アクセス。サイトの都合で削除等がなされる場合もあり得ることをお断りします）。